Gold Link Corporation

GOLD FOURSEASONS REPORT

2012年秋号

発行日　平成24年9月21日

目次：

今年第2四半期の世界金需要　1

特集：アメリカ大統領と金　5

COLUMN：ツタンカーメン展観覧記　10

今年第2四半期の世界金需要

産金業界団体のワールド・ゴールド・カウンシル（WGC）が8月16日発表した『2012年第2四半期の世界金需要報告』によると、今年第2四半期（4-6月）の金需要は2年ぶりの低水準に落ち込みました。各国の中央銀行による金の購入は過去最高を記録したものの、主要消費国であるインドと中国の落ち込みが響きました。第2四半期の金需要は前年同期比7%減の990トンでした。平均金価格は、1609.49ドル/オンスと前年同期比7%上回りました。

2012年第2四半期は、金の国際相場にとって広い範囲で調整局面となり、期間中はほぼ1,600ドル/オンスの上下100ドルの範囲で推移しました。方向感が定まらないので投資部門を中心に消費者の反応が別れ、買い増しに動く消費者がいる一方、ポジションを清算して利益を確定する投資家も見受けられました。これら2つの相反する動きは拮抗し、投資の全分野で顕著になり、ETFの売り越しはわずか0.8トンにとどまりました。

投資需要は1年前の水準には及ばないものの2008年から続いている高水準を維持しました。金が資産保全と流動性確保のため利用されていることの証左だと言えます。

◎インド・中国の需要

▽インド

インドの金需要は、現地通貨建て金価格が過去最高を記録する中、124.8トンまで減少しました。インドルピーが対米ドルで下落した結果（次ページグラフ参照）、金価格が300,000ルピー/g（インド都市部の平均月収並）を上回る最高値を記録し、需要が前年同期比30%も減少しました。

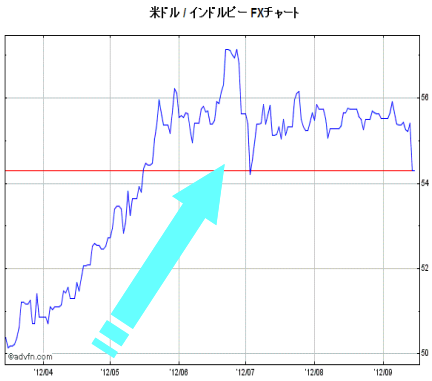
（2 ページに続く）

■世界金需要

	Q2.11	Q3.11	Q4.11	Q1.12	Q2.12	前年同期比
宝飾品	442.5	465.6	476.5	519.8	418.3	-15%
エレクトロニクス	83.8	87.1	80.9	75.4	80.5	-4%
その他	23.2	22.3	21.0	21.8	21.6	-8%
歯科	10.9	10.8	10.4	10.5	10.1	-7%
工業・歯科小計	117.9	120.2	112.3	107.7	112.2	-5%
金塊退蔵	222.9	294.2	269.0	260.0	226.2	-13%
公的金貨	64.2	76.2	54.3	51.3	53.8	+7%
メダル類	20.5	20.0	18.1	26.6	22.8	-9%
小売り投資小計	307.7	390.5	341.3	337.9	302.8	-10%
ETF・関連商品	51.7	77.6	86.8	51.4	-0.8	---
投資合計	359.4	468.1	428.2	389.3	302.0	-23%
需要合計	919.8	1,053.9	1,017.0	1,097.6	990.0	-7%

今年第2四半期の世界金需要

第2四半期は数々の要因が重なって、インドの金需要に逆風をもたらしました。GDP成長率の鈍化、為替変動に伴う国内価格の最高値記録、高金利、モンスーン季の雨量不足の恐れ等により需要が縮小しました。しかし、ここに来て長い間安くなることを待っていた人達がしびれを切らして買い始めているそうです。ヒンズー教の祭典を控え、インド人にとっては、金は生活にどうしても必要なもの。高くても下がる気配がないのなら買わざるを得ないという実情があり、今後は価格が上昇しても需要は増えると見られます。



▽中国

中国の金需要は144.9ﾄﾝと前年同期比７％の減少でした。GDP成長率の鈍化や金価格の方向感を欠く動きに消費者の購買意欲が削がれました。中国の金投資家は、上昇する過程で買いに入る傾向があります。第2四半期の調整相場は需要を抑制する方向に働きました。しかし、中小の地方銀行が相次いで金現物商品を取り扱い始めていることからも金への関心は高いままであると伺えます。

◎ヨーロッパ

欧州は前年同期比15％増加し金の資産保全効果に対して強い信頼を寄せていることが改めて浮き彫りになりました。欧州全体の需要は77.6ﾄﾝと過去5年間の四半期平均65.2ﾄﾝを19％上回っています。一定の利益確定売りが出た第1四半期を経て買いを入れやすい好都合な環境になったほか、進行中のユーロ危機に伴う懸念に後押しされました。

◎中央銀行

第2四半期もまた中央銀行による大量の購入があり需要は157.5ﾄﾝに達しました。これは中央銀行が2009年第2四半期に買い越しに転じて以来、四半期の需要として最高で、前年同期に記録した66.2ﾄﾝの2倍以上に上ります。中央銀行の需要は第2四半期の総需要の16％を占めました。一部の中央銀行は金準備の増強に対して明確な意向を示しています。カザフスタン国立銀行は2012年の金購入目標を24.5ﾄﾝから26ﾄﾝに引き上げると発表しました。同行は準備資産の米ドル依存引き下げに向け今後2～3年間は国内の金生産量全量を購入する計画を発表しており準備資産の15％を金にする目標を決定しています。

■主要国需要

	2012年第2四半期			前年同期比		
	宝飾品	投資	合計	宝飾品	投資	合計
インド	124.8	56.5	181.3	-30%	-51%	-38%
中国	103.1	53.1	156.1	-8%	-3%	-6%
中東	45.4	7.6	53.0	-2%	5%	-1%
トルコ	23.1	17.5	40.6	4%	19%	10%
日本	3.8	5.1	8.9	-7%	―――	―――
米国	19.8	14.4	34.2	-7%	-27%	-17%
欧州	8.8	77.6	86.4	-12%	15%	11%

注1：単位はトン

注2：前年同期比は12年第1四半期と11年第1四半期との比較

注3：中国の需要は台湾・香港を含んだ数値。

■世界金供給

	Q2.11	Q3.11	Q4.11	Q1.12	Q2.12	前年同期比
鉱山生産	708.8	746.2	717.1	673.8	706.4	±0%
生産者ヘッジ	-10.0	10.0	-6.0	5.0	-11.0	---
鉱山生産小計	698.8	756.2	711.1	678.8	695.4	-3%
公的金売却	-69.4	-148.4	-92.7	---	---	―――
リサイクル	429.3	426.5	414.9	391.5	363.7	-12%
供給合計	1,058.7	1,034.4	1,033.3	1,070.3	1,059.1	-6%

注1：単位はトン

注2：上記のQは四半期

注3：前年同期比はQ2..12とQ2.11との比較

注4：公的金売却のマイナス表記は中央銀行の買い越しを意味する。

今年第2四半期の世界金需要

◎ロシア金市場の目覚しい進化

▽歴史

ロシア連邦は国土面積で世界最大を誇り、世界の金市場で有数のプレーヤーです。過去、年間でほぼ1300ﾄﾝの金がロシアに蓄積され、宝飾品の形で個人が保有しています。

1991年ソビエト連邦が崩壊してからロシアは世界から隔離された中央計画経済から世界との融合を徐々に深める経済へと大きな変貌を遂げました。しかし、97年から98年にかけてロシア金融危機とアジア金融危機の煽りでロシア政府は債務の支払停止とルーブル切り下げに追い込まれました。この期間中、割引短期国債の金利は150%まで急上昇し、ロシアの通貨の信頼が大きく失墜しました。98年夏、IMFは、世界銀行と日本国政府とともにロシア政府に対して226億米ﾄﾞﾙの融資を供与しましたが、ロシアはすでにソ連から継承した対外債務の元利払いに苦労していたことから再建への道は痛みを伴うものになりました。ハイパーインフレにも見舞われ、年間平均インフレ率は97年の11%から98年には84.4%まで上昇しました。98年から99年にかけて対米ドルでルーブルが75%超下落したこともありルーブル建ての金価格は250%以上急騰しました。

2000年代に入ってからの10年間は、ロシア経済は年平均6.9%のペースで成長しました。ロシアの原油輸出は12倍の2410億米ﾄﾞﾙまで増加し、年間インフレ率は2008年には13.3%に低下し、失業率も6.4%まで下がりました。この結果、中産階級が拡大したほか資産と実質可処分所得が増加しました。

▽需要

ロシアは世界第4位の金宝飾品消費国です。過去10年間、年平均8.7%増加し2011年は前年比16.3%増の76.7トンに達しました。

投資需要としては金地金及び金貨や消費預託金口座があります。2001年以降金貨を販売する銀行が4倍に増えたこともあり、金貨需要が大幅に伸びました。金貨投資の魅力は、法定通貨には18%のVAT(付加価値税）が免除されるほか輸入関税も課されないことにあります。

▽中央銀行

今年第2四半期の世界金需要

ロシア中央銀行（CBR)は近年、原油主導型の長期的な経済成長と原油価格の高騰に支えられ、外貨準備の多様化を目指し金準備を大幅に増強しております。担保資産として金に金融上の役割があると考えており、2011年には金保有を94ﾄﾝ増やしました。ここ５年間でロシア中央銀行が購入した金は、計500ﾄﾝを超え同期間中最も金準備を増強しました。以下、中国（454トン）とインド（200トン）が続きます。ロシアの総外貨準備は現在、中国、日本、サウジアラビア、米国に次ぐ世界第5位の規模です。現在の公的金保有高は918ﾄﾝで2012年6月時点で総外貨準備の9.2%を占めておりますが、世界的水準としてはごくわずかな割合にとどまっております。原油価格が上昇した場合、ロシアはさらに金を積み増す可能性があります。20%の水準まで増強するとすれば、約1,070ﾄﾝの追加購入が必要になります。1994年1月に記録した最高水準の60.1%に戻すとした場合、現行の金価格で5,000ﾄﾝ近く金準備を増強する計算になります。

ロシアは、国際通貨制度において金がより重要な役割を果たすべきだと論じてきました。ロシアの大統領主席経済補佐官は、IMF発行の特別引出し権（SDR）に基づく新しい国際通貨の構成バスケット（現在は、米ドル・日本円・ユーロ・ポンドの４通貨）に金地金を追加することに対して支持を表明しました。

ロシア中央銀行は、外貨準備の管理という点で金に対する支持を示しており、特にエネルギー価格の上昇に伴ってロシアの石油収入が持ち直すとすればこの傾向が続くでしょう。中央銀行が金を保有する理論的根拠は、通貨を買い戻しできない場合や国際資本市場で見放された場合に金が資金源として利用できるという点にあります。ロシアをはじめとする中央銀行は金の復活に対して自信を深めております。　これまで金はロシアの産業開発への資金調達の担保としても外国から穀物を輸入するためにも使われてきました。2011年8月、最高90日間、7%の金利で銀行が金を担保として利用することを認めるプログラムを開始しました。国際的にも金融部門での金の役割は大きくなってきています。他国も金を自国の金融システムに組み込む方法を検討するようになっています。

今後も中央銀行が金に信頼を寄せていることを後ろ盾として、また、首都圏以外を中心に経済環境が良好であるため金需要は伸びていくでしょう。

特集：アメリカ大統領とゴールド

◎アメリカ大統領選挙の不思議

●日程

大統領選挙の日は「11月の第1月曜日の翌日」と決められています。なぜ、「11月の第1火曜日」もしくは「11月の第2火曜日」でないのか不思議だと思いませんか。

このような規定になっている理由は、アメリカはキリスト教国家であり、キリスト教徒にとっての安息日である日曜日に投票などとんでもないことで、日曜日は教会に行って静かに過ごす日なのです。それでは、翌月曜日を投票日にすればいいようなものですが、この制度が誕生した当時のアメリカは、鉄道も自動車もない時代。移動手段は専ら馬車でした。月曜日の投票だと場所によっては日曜日に自宅を出なければなりません。これはダメ。そこで火曜日を投票日にすることになったのですが、第1火曜日にすると11月1日になる可能性があります。11月1日はキリスト教徒にとって大事な「諸聖人の日。」この日にならないようにしなければなりません。それならばと「11月の第2火曜日」にすると11月14日までずれ込む可能性があり、もともと選挙は農閑期に実施しようとして11月上旬としたのにここまで遅くなると農家の冬支度に支障がでます。このように考慮した結果、「第1月曜日の翌日」となりました。

●直接選挙！？

アメリカの大統領選の仕組みは、ちょっと変わっています。一見、候補者に投票する直接選挙のように見えますが、実は選挙人を選ぶ間接選挙なのです。「オバマ候補に１票」「ロムニー候補に１票」ではなく、「オバマ（またはロムニー）候補を支持する選挙人を選ぶ」というややこしいことを未だに慣例を守って続けています。この結果、現実にはないのですが、選ばれたオバマ候補支持の選挙人が本選挙で「ロムニー」と投票する自由は許されているそうです。

●1票の格差有り

選挙人の数はどのように決められているかというと上下両院の議員数と同数です。アメリカの議会は上院と下院で構成されており、下院の議席数は人口比率で厳密に一票の等価が守られています。しかし、上院議員は各州2人。人口最大のカリフォルニア州は約3725万人。ワイオミング州は約56万人。これ程差があっても「上院議員2人」は変わりません。法の下の平等など個人の権利や民主主義の原則をひときわ重んじるはずのアメリカが「1票の格差66倍」を許しています。なぜでしょうか？

アメリカの成り立ちは独立性の強いステーツ（「州と訳されていますが感覚的には1つの国家に近い）の集合体でした。独立当時は、イギリスから独立するという一点で集合したので、それを果たしてからは不都合が生じました。特に、国際面で他国と外交関係を結ぼうにも、集まったステーツを代表する機関も役職も人物もいない。ステーツごとに税制も刑罰も違う。これでは具合が悪いと考える者もいたが、ステーツこそ自分の所属する国家でその上に何らかの権力を置くのは嫌だという勢力も強かった。1788年成立の合衆国憲法を審議した憲法会議で議論になったのが連邦（United States)の代表を如何にして選ぶかだった。そこでは二つの案が出されました。

①「人口に比例した議員を選出して二院制」

②「ステーツの人口の多少を問わず同数の議員を選出した一院制。」

そこで、

「ステーツごとに同じ数の議員で構成する上院と人口比例にする下院の二院制とする」という妥協案が出てこれで決着したという歴史があります。建国当時の制度を今

特集：アメリカ大統領とゴールド

も守っているのです。

州の独立色が強いというのは連邦準備銀行が12行有り、紙幣の発行権をもっている（紙幣の総量の管理は連邦準備制度が行っています）というところにも残っています。

◎金の保有を禁止した大統領

アメリカで金の保有が禁止された時代がありました。1933年4月5日、当時の大統領、フランクリン・ルーズベルトはアメリカ国民は、個人も企業も金融機関もすべてにおいて金地金と銀地金（コイン、バー、金証書まですべて含む）を保有、貯蔵してはならないという大統領命令を発しました。（デフレ対策として実施しましたが、効果はあまりありませんでした。）

これによりアメリカ人が保有していた金地金が没収され、金の売買が一切禁止されたという歴史があります。当時は世界大恐慌の時期であり、これを乗り切るため「戦時法令」という口実でアメリカ国民の財産を奪い、所有権を侵害する行為を強引に遂行しました。

米国民は自分たちが所有する金地金を強引に換金させられました。この時の政府の言い値は1トロイオンス（31.1g）あたり20.67ドルという安値でした。

その後、第二次世界大戦後はアメリカによる新しい国際金融体制（ブレトン・ウッズ体制）が構築されて《金1トロイオンス＝35ドル》の固定相場になりました。

この金（ゴールド）保有禁止令は1933年に施行されて以来、解禁されたのは1974年12月31日で、つい最近のことです。

2010年7月アメリカ議会は「ドット・フランク法」を可決しました。アメリカ政府はこの法律で公設の取引所以外での個別の取引を規制しようとしました。その中には金地金の取引も含まれていると解釈（全体で、3000ページにも及ぶ法律で表現が曖昧で大雑把に書かれている）もでき、アメリカ人に過去、金が買えなくなった時代があったという史実を想起させました。

◎金本位制を放棄した大統領

1971年、時のアメリカ大統領ニクソンは、いきなり金本位制を放棄し、ドルと金の交換を停止するという政策を一方的に発表しました。

そもそも金本位制とは、通貨と金をリンクさせることです。金1トロイオンスは35ドルと交換（兌換といいます）できると決まっていました。金はその量に限度がありますから、当然ドルの発行量に制限がかかるわけです。今のようなとめどのないドルを発行すれば、それに応じた金が存在していませんから、必然的にドルは暴落を起こしてしまいます。米国が、（ドルの大量発行という）放漫財政をすればするほど、世界各国は、手に入れたドルを金に換えようとしますので米国からは金が流出し、結果としてドルを担保するはずの金がなくなり通貨暴落を引き起こします。このように、金本位制のもとでは放漫財政や通貨の垂れ流しは御法度です。金の準備がないのに通貨を発行するというのは不可能なわけです。となると金本位制は、常に金の量が通貨発行を縛りますので、成長を目指す経済には大きな制約となります。反面、現在のような通貨の無限な発行はできませんので、政府の債務問題やマネタリーインフレの問題は起きません。

なぜ、金本位制を放棄したのでしょう？第二次世界大戦後世界の中心となって政治的にも軍事的にも経済的にも覇権を握った米国でしたが、終戦後25年以上経った当時

特集：アメリカ大統領とゴールド

はベトナム戦争の泥沼から抜け出せず、膨大な戦争の出費と国内のインフレに悩まされていました。これが現在なら、国債を発行し景気対策を行うのでしょうが、金本位制のもとでは放漫な財政運営は許されませんから健全財政を目指し、公務員給与を凍結したり、物価統制令などを行いました。悲劇的なことにいくら緊縮策をとっても経済は良くならず、世界各国はドルに懸念を抱き米国にドルを持ち込んでは金との交換を始めました。

このような袋小路に風穴を開けるべくニクソン大統領は金本位制を放棄しました。それもある日突然発表し（アメリカ議会にさえ事前に知らせていませんでした。）、経済のシステムそのものを変えてしまいました。まさにアメリカ大統領の独断でした。

しばらく前は、荒唐無稽な話としてだれも相手にしていませんでしたが、今、金本位制を復活させようかという議論が、大統領選挙戦で行われています。金本位制を離脱したのがアメリカ大統領の鶴の一声だったように、金本位制の復活（昔のような100%の兌換はありえないでしょうが、数%の兌換なら）も、ある日突然宣言されるかもしれません。（いま、アメリカはドルの発行量を裏付ける金を保有していませんが静かに買い進んでいるかも・・・。）要注目です。

◎“オズの魔法使い”と金融政策論・・・2012年大統領選

11月6日に投開票される米国の大統領選は、民主党オバマ対共和党ロムニーの一騎打ち。

オバマ氏とロムニー氏の経済思想は、伝統的な民主党対共和党の対決。オバマ氏は「政府が経済政策を打って経済回復できる」という立場で、ロムニー氏は「政府がやる政策は民間の邪魔になるだけ」という立場です。

オバマ氏は2010年のバーナンキFRB（連邦準備制度理事会）議長の再任を後押ししました。そして、今の通貨管理制による金融政策で雇用問題を解決しようとしています。

一方、ロムニー氏は大統領になったら14年に人気を終えるバーナンキ議長を再任しないと明言しました。さらに、副大統領に指名されたライアン氏はFRBを廃止して金本位制にすることを主張しています。

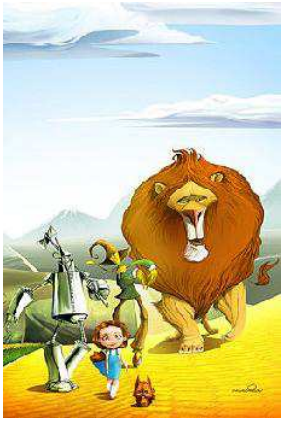
こうしてみると、今回の大統領選は19世紀の大統領選の再現です。時は1896年、当時の米国は、デフレの真っ最中で東部の産業資本からの借金で開拓していた西部の農民は、デフレによる債務の実質的増加に苦しんでいました。

そのため大統領選の大きな争点としてデフレ対策が浮上し、民主党候補ブライアンは、金本位制から金銀複本位制への移行による通貨の増大（今と同様、紙幣を刷る政策）を主張しました。「人々を金の十字架にはりつけてはならない。」というブライアンの演説は、アメリカ政治史上で有名なものです。一方、共和党候補のマッキンリーはあくまでも金本位制にとどまることを主張しました。

この政治論争がベースとなって有名な「オズの魔法使い」が書かれているといい

特集：アメリカ大統領とゴールド

ます。オズ＝OZは金オンスの略号、主人公ドロシーは伝統的なアメリカ人の価値観を表しており、脳のない案山子（かかし）は農民、心のないブリキ人形は産業資本、そして勇気のないライオンはブライアンのメタファー（暗喩）だとされています。黄色いレンガ道は金本位制で、共和党候補のマッキンリーは西の悪い魔女として登場します。



帰り道を探すドロシーは黄色いレンガ道を単純にたどるのはダメだと知り、魔法使いオズが役に立たず、その代わりに自分の「銀の靴」に魔力があることに気づきます。要は、作者のボームは、共和党が主張する金本位制よりも民主党の金銀本位制を支持しているという解釈です。

ちなみに実際の大統領選では、共和党候補が勝利。金本位制は維持されたものの1898年にアラスカで金鉱が発見され、さらに、南アフリカからも金が流入した結果（金の保有量が増え紙幣を増やすことができ）、デフレは解消されました。

◎過激候補ロン・ポール

共和党の予備選挙の結果、大統領候補としてロムニー氏が選出されました。ロン・ポール下院議員は、ロムニー氏に敗れましたが、若者の支持を獲得しました。若者が彼を支持したという事実は、ロムニー候補の限界を物語っています。ポール氏はピッツバーグ生まれで医師となり、米空軍の航空医官として働いたこともある人物で、その後、テキサス州で個人開業し、共和党員として政治の道に入りました。大統領選挙への挑戦は今回が３度目でした。彼の政治主張は、連邦政府の役割を極端に限定し、完全自由市場の資本主義を擁護するもので、FRBは不要と唱えています。「FRBは金融緩和によるマネーでジャブジャブにする政策を一貫して行ってきた。それは誤った資源配分と人工的な景気加熱につながり、FRB製のバブルが崩壊したとき、景気後退や恐慌をもたらす」「FRBを創設して以来、バブルを生成し崩壊させる金融政策によって、米国の中間層は犠牲になってきた。またFRBの政策はインフレになった通貨を使うことで福祉国家にかかる本当のコストを隠そうとする政治家に恩恵を与えている。議会は今こそこうした特別な利害や大きな政府への欲求よりも米国民の利害を優先させるべきだ」

ポール氏は通貨を無制限に印刷できるFRBがある限り、ドルの価値低下を招き、長期的に米国を蝕む財政支出を継続してしまうと考えています。そこで彼は、金本位制に戻るべきだと提唱し、金のような有限有形で価値があるグローバル資産とドルをリンクさせることで通貨価値が安定すると考えています。

他、国連脱退等、彼の主張は非現実的だと主要メディアや専門家から否定されてきましたが、共和党内で無視できない存在になってきており、共和党の政策に関して影響力を獲得するかもしれません。

特集：アメリカ大統領とゴールド

◎共和党副大統領候補　ポール・ライアン

共和党副大統領候補に指名されたポール・ライアンは下院議員で現在は、下院の予算委員長を務めています。彼の政治思想は、生粋の保守派であり新自由主義者です。
彼の政治思想に大きな影響を与えたのがアイン・ランド著の「肩をすくめるアトラス」です。アイン・ランドは、サントペテルブルグ生まれで父親が薬局を経営する裕福な家庭に育ち、大学で歴史を専攻し首席で卒業。革命下のロシアからシカゴに移住した人物です。彼に影響を受けた人物として他にも元FRB議長のグリーンスパンがいます。「ランドと出会ったことによって資本主義は効率的であるばかりでなく、道徳的でもある」といってます。「肩をすくめるアトラス」は、アメリカの議会図書館が行った調査では、20世紀で聖書についで読者の人生に影響を与えた本とされ、500万部以上の売り上げを記録しています。

アメリカの小中学生は、アイン・ランドのこの本のダイジェスト版を読み、「理性なきものは動物である。他の邪魔にならぬ範囲で（そんなことは不可能だが）個人の利益のみを追求せよ、他人のことは無視しなければ自由を得ることはできない・・」と教えられます。ハイスクールに入ると完全版が無料配布されます。スポンサーはゴールドマン・サックスやJPモルガン・チェース等。この作品の性格がわかると思います。

ライアン候補も思春期に熱中した熱狂的読者でした。自分のスタッフやインターンたちにランドの著作を読むよう求めているそうです。彼は財政再建に熱心なのだが、その政策は偏っています。富裕層に減税を行い、貧困者への支援を削減するというものです。この点はランドが成功者を崇め奉り「タカリ屋ども」を蔑むのと軌を一にしています。助けを必要とする人たちを支援するメディケイドやフードスタンプ、その他のプログラムの過酷な削減を進めるにあたって、ライアン氏は、単にお金を倹約する方法を探しているだけでなく、同時に貧困者の生活を困難にしようと試みているように見えますーそれが彼らのためになるといって。

今年3月、不運な人たちへの支援を削減する案を説明した際「セーフティネットをハンモックに変えて健常者に惰眠を貪らせ、他人に依存して安逸を貪るような生活に落とし込むことを望んでいないのです。そんなことをすれば、彼らの意欲を失わせ、生活の大半において自立し自活するインセンティブをなくしてしまうことになります。」と発言しました。不況下で失業手当とフードスタンプに頼ることを余儀なくされているアメリカ人達を安楽なハンモックでのうのうとしている人達と考えている様です。

金融政策について彼は、議会でバーナンキを責めたことがあります。一次産品価格と長期金利の上昇は、高いインフレの先触れだと言い切り「国家がその市民にに対する仕打ちとして、貨幣の毀損ほど悪質なものはない」と述べてます。その後、インフレ率は上がらず、長期金利は急落しました。バーナンキは動きませんでしたが、もし、ライアンの主張をいれて金融引き締めを行っていれば、アメリカ経済は、今よりもっとひどいことになっていたことは間違いないと思われます。

共和党が勝ち、政権を取ればバーナンキは首です。FRBのメンバーを入れ替え、緊縮策を取るようなことになれば、金の価格も大きく影響を受けるでしょう。

COLUMN：ツタンカーメン展観覧記

先日、上野の森美術館で「エジプト考古学博物館所蔵ツタンカーメン展～黄金の秘宝と少年王の真実～」を観てきました。当日は入場制限が有り、大混雑でした。

ツタンカーメンとは、古代エジプトのファラオ（王様）であり、90人以上のファラオがいたと今ではわかっていますが、ツタンカーメンは別名、少年王といわれており、10歳頃即位し、18歳頃亡くなったファラオでした。在位中もそれほどめぼしい実績を上げた王様ではありませんでした。在位9年程度で、死後230年後にはツタンカーメン王の墓の上にラムセス6世の王墓を作るための小屋が建てられるなど忘れられた存在でした。それが再び、脚光を浴びたのが20世紀初頭です。古代エジプトのファラオの墓は、どれも盗掘にあい、墓内の全てが持ち出され、何も残されてない有様でした。それが3000年間、一度も盗掘にあうこともなく、封印されたままの王墓が発見されたのです。考古学上の奇跡以外のなにものでもありませんでした。また、少しオカルト的ですが、この発見に関わった発掘関係者に奇怪な死が相次ぎ、ファラオの呪い？（墓の扉には「王を妨げるものは死の翼に触れるべし」というヒエログリフ（エジプト象形文字）が刻まれていたそうです。）としてツタンカーメンの名をさらに有名なものにしました。王墓の発掘から6年後には12人の関係者（発掘調査の金主、その弟、看護婦、ミイラに手を触れた学者、怪死の調査に当たったエジプトの政府役人等）が変死し、7年後には墓を見た関係者の生き残りは2人だけとなってしまいました。本当に呪いなのか、ツタンカーメンをめぐる大きな謎の一つです。

このような経緯で発見された2000点を超す副葬品のなかから、選りすぐりのものが今回日本にやってきました。

すでに海外各地を巡回しており、1,000万人以上の人々が訪れているそうです。

ツタンカーメンで有名なのは黄金のマスクですが、現在法律でエジプトから持ち出せなくなってしまったそうで、見られず残念でしたが、それでも考古学のハワス博士監修のもと、ツタンカーメンの王墓から発見された品50点やツタンカーメンの親族の品など合計122点が並び見応え充分でした。

その中でも注目は、ツタンカーメン王の黄金のカノポス。カノポスとはツタンカーメン王の内臓が保管されていた器のことを指し、今回展示されているカノポス内には防腐処理された王の肝臓が入っていたそうです。

COLUMN：ツタンカーメン展観覧記

同展では77ｃｍのツタンカーメンの半身像も展示されていました。ツタンカーメンの肖像の中で最も美しいものの1つといわれる肖像で目の前で見ていると吸い込まれてしまいそうなくらいの迫力があるものでした。ほかにも、ツタンカーメンのミイラが身にまとっていた黄金の襟飾り、短剣やツタンカーメンの子供を埋葬したと考えられている子供用カルトーナージュマスク、化粧容器など貴重な品揃えでした。

今回の展示品には純金を使用しているものが非常に多く、常々、なぜそれほどまでにエジプトの王様は純金にこだわっていたのか不思議だったのですが、古代エジプト人は金に別のものを混ぜて伸ばそうという考えは一切なかったそうです。黄金とは神様の肉体であり、当時、サビない金属といえば黄金だけでした。サビないということは、永遠性があるということで非常に重要でした。その上ピカピカに光っているので太陽を連想させました。太陽＝黄金＝永遠となれば王族が欲しがるのは当然であり、一人の王が使用した黄金は3トン、4トンが当たり前だったようです。王にとって黄金をどれほど確保するかがその偉大さ・強さに関わってくるということで、それは今現在の国別の金の保有量を調べてみても同じことが言えるかもしれません。

今は、アメリカは圧倒的な保有量を誇り、中国は国策として国内に金を貯め込んでいます。

純金とは未来永劫、価値を失わない、それどころか価値が保全される唯一無二のものであるということを、今回のツタンカーメン展を通して改めて実感できました。

（y）

エジプト考古学博物館所蔵
ツタンカーメン展 ～黄金の秘宝と少年王の真実～

2012年8月4日(土)～2012年12月9日(日)

[平　日] 9:30～18:00 開館

[土日祝] 9:00～18:00 開館

※いずれも入場は閉館60分前まで

[平　日] 一般・大学生 2,700円　高校生 1,800円　中・小学生 1,400円

[土日祝] 一般・大学生 3,000円　高校生 2,100円　中・小学生 1,700円

Gold Link Corporation

ホームページもご覧下さい。
http://www.goldtsumitatekun.com

株式会社ゴールドリンク

Gold Link Corporation

東京都千代田区飯田橋2丁目8番5号
多幸ビル九段8階～10階
電話 03(5275)5588
FAX 03(5275)5677
Email: info@goldtsumitatekun.com

GOLD FOURSEASONS REPORT

2012年秋号

2010年9月1日創刊　2012年9月21日発行　通巻第9号

●本誌に掲載されている情報は内容が正確であるよう最善を尽くしておりますが、内容についての一切の責任を負うものではありません。●本誌に掲載されている情報に基づいて投資活動を行った結果、損害が発生したとしても、弊社はその責任を負うものではありません。●本誌に掲載されている内容の著作権は、株式会社ゴールドリンクに帰属します。弊社に無断で転用、複製等することは固くお断りします。